法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-03

西脇順三郎『近代の寓話』論

山﨑, 修平

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
92
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
16
(発行年 / Year)
2024-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030821

西脇順三郎『近代の寓話』論

人文科学研究科　日本文学専攻
博士後期課程３年　山﨑　修平

はじめに

西脇順三郎の詩集『近代の寓話』は、一九五三年に創元社より刊行された。日本語によって創作された詩集では、『Ambarvalia』、『旅人かへらず』に続く第三の詩集である。詩集には五十二篇もの詩が収められており、第二次世界大戦前に書かれた二篇を除けば、すべて行分け詩で構成されている。先行研究としては、詩集『Ambarvalia』や『旅人かへらず』をめぐる詩論は散見されるものの、『近代の寓話』以降の詩集である『第三の神話』、『失われた時』、『豊穣の女神』、『えてるたにす』、『宝石の眠り』、『禮記』、『壌歌』、『鹿門』、『人類』への論はいまだ十分なものとは言い難い。「近代詩の父」と称される萩原朔太郎と、西脇順三郎は同時期に活動していたにも拘らず、学術的な言及のなされ方には大きな差異が生じているのが現状である。理由の一つとして挙げられるのは、

西脇順三郎の詩は難解である、という批評がしばしば世間で聞かれる[一]

ということが先行研究にてしばしば言及される。このことは、西脇の詩法にも関係していることである。なぜなら、萩原朔太郎ら近代詩と位置付けられている詩人の詩は、自身の経験や体験に基づくものが詩に結実されていると考えられているのに対し、現代詩のはじまりと位置付けられている西脇の詩は、必ずしも自身の経験や体験に基づくものではないイマジネーションの産物とこれまで目されてきたからである。このことは、西脇がシュルレアリスムの「紹介」し、あるいは「シュルレアリスムの実践例」として詩「馥郁タル火夫」を創作したことも影響していると考えられる。つまり、シュルレアリスムの紹介者たる西脇の詩は、シュルレアリスムの詩であるのではないかという曲解が為されているのである。そのため、西脇の詩を読み解くことは、西脇のイマジネーションの産物と対峙することを意味しているため、どのようにも解釈が成立し得るという考えのもとに、避けられてきたと考えられる。現に、西脇の詩について語られるとき、西脇の人柄やエピソードは語られることはあっても、詩に関しては、「独自の」あるいは、「西洋的な」という曖昧な形容による評言が、これまで批評の大きな位置を占めてきた。確かに、『Ambarvalia』のもつ鮮烈な詩篇は、萩原朔太郎らに激賞され、詩壇に衝撃を与えた。しかしながら、これに続く詩集や、西脇の詩業のすべてを『Ambarvalia』一冊の印象による評言がなされるべきではないと考える[二]。

本論文では、詩集『近代の寓話』の詩句の分析をすることにより、西脇自身

の体験・経験が詩篇に表れているか明示することを目的とする。西脇の経験や体験に基づくもの――私性が、『Ambarvalia』や『旅人かへらず』に共通して詩集『近代の寓話』にも通底しうるのか、更には植物名などの固有名も、論を支える軸とする。

これまで研究発表してきた論文では、『Ambarvalia』と『旅人かへらず』には、詩法の差異こそあれども、どちらの詩集にも私性が内在しており、西脇の経験や体験が込められていると論じた[三]。本論文において、『近代の寓話』においても、共通して通底する西脇の私性が作中に認められるのであれば、近代詩人・西脇という再定義を提示することになると考える。

第一項　体験と想像を織り交ぜる詩法

一九三三年に刊行された『Ambarvalia』は西脇順三郎にとって、日本語で最初に編まれた詩集であった。戦間期を経て一九四七年、実に一四年ぶりに詩集『旅人かへらず』が刊行された。

この論文にて論じる対象である『近代の寓話』は、先の二冊の詩集に続く日本語によるものであり、一九五三年に創元社より刊行された。西脇の長きにわたる詩業において、『近代の寓話』は、後の『第三の神話』、『失われた時』と合わせて中期の作品と位置付けたい。なぜなら、初期作品である『Ambarvalia』と『旅人かへらず』における詩法の変化や、モチーフの違いに比べ、『近代の寓話』を含めた三冊は、詩法の深化こそ見られども、扱われている語彙やモチーフには、ほとんど差異が認められないからである。合わせて、中期から続く、『豊穣の女神』、『えてるたにす』、『宝石の眠り』、『禮記』、『壌歌』、『鹿門』、『人類』を後期作品と位置付ける論点については、本論文とは別の機会にまとめたい。

『近代の寓話』に収められた詩篇の初出は、一九二六年から一九五三年という長期間にわたるものであるが、詩集の冒頭に「また時間的にみるとこれ等の詩の順位は初めの部分は最近のものでその後の方のものは三四年前のものである。これに追加として最後の部分には友人のすゝめで『あむばるわりあ』以前の若い時の詩をつけた」という西脇の言がある。筑摩書房の『定本西脇順三郎全詩集』では、西脇の意向によりこの「最後の部分」にあたる三作は削除されている。本論文では、削除前の『近代の寓話』初出にもとづく。大方の詩篇は戦後に編まれたものであり、つまり言論統制が解かれた時期に書かれたものであり、いつどこで何をしたか、という私性の表出を作品内に表しても拘束される恐れのない時期であるということを、前提にして論じることにする。

西脇の詩では、名詞の多さが特徴としてある。『Ambarvalia』における「西洋的な」モティーフ、とりわけ西洋に由来する植物や文物が頻出している。他方、『旅人かへらず』では、日本固有の植物が散見され、「永遠の旅人」たる西脇の「さみしさ」の表出として機能している。『近代の寓話』においても名詞は頻出しているが、

> 読者に詩の謎解きを強いるようなゲームとしての挑戦的な魅力も内包している。[四]

と、千葉宣一が述べているように、「謎解き」の部分を「難解」とされる向きがあった。

そのため第一項では、これまで「難解」とされてきた西脇の詩から、西脇の私性が抽出できるかを調査し、この結果、西脇の詩が従来とは異なる読みについて論じる。そのために、まずは『近代の寓話』における西脇自身の体験や経験に通じる詩句を渉猟することにする。なお、西脇の詩篇における引喩に関しては、新倉俊一による『西脇順三郎全詩引喩集成』に詩句の典拠がまとめられ

ている。西脇自身の協力を得て編まれた資料でもあることを考慮し、適宜参考することにするが、論文という学術的なアプローチと、作者である西脇の言を弁別し論じる必要があることを踏まえ、あくまでも参考に留めることをここに明記する。

最初に、詩集の題名でもあり、巻頭に置かれ、先行文献に於いても重要性が高いとされている詩篇「近代の寓話」を全文引用する。

近代の寓話

四月の末の寓話は線的なものだ
半島には青銅色の麦とキャラ色の油菜
たおやめの衣のようにさびれていた
考える故に存在はなくなる
人間の存在は死後にあるのだ
人間でなくなる時に最大な存在
に合流するのだ私はいま
あまり多くを語りたくない
ただ罌粟(けし)の家の人々と
形而上学的神話をやっている人々と
ワサビののびる落合でお湯にはいるだけだ
アンドロメダのことを私はひそかに思う
向うの家ではたおやめが横になり
女同士で碁をうつている
ふところから手を出して考えている
われわれ哲学者はこわれた水車の前で
ツツジとアヤメをもつて記念の
写真をうつして又お湯にはいり
それから河骨(こうほね)のような酒をついで
夜中幾何的な思考にひたつたのだ
ベトウズの自殺論の話をしながら
道玄坂をのぼつた頃の彼のことを考え
たり白髪のアインシュタインがアメリカの村を
歩いていることなど思つてねむれない
ひとりでネッコ川のほとりを走る
白い道を朝早くセコの宿へ歩くのだ
一本のスモヽの木が白い花をつけて
道ばたに曲がつている、ウグイスの鳴く方を
みれば深山(みやま)の桜はもう散つていた
岩にしがみつく青ざめた葦、シャガの花
はむらがつて霞の中にたれていた
私の頭髪はムジナの灰色になつた
忽然としてオフィーリア的思考
野イチゴ、レンゲ草キンポウゲ野バラ
スミレを摘んだ鉛筆と一緒に手に一杯
にぎるこの花束
あのたおやめにあの果てしない恋心(れんしん)
のためにパスカルとリルケの女とともに
この水精の呪いのために

（ルビは「恋心」のみママ、後は難読文字のみ付した）

事前の手がかりなしに一読するだけでは、この詩がシュルレアリスムの技法を用いたオートマティスムによって書かれたと解してしまう可能性が生じるだろう。それほどまでに、この詩篇における詩句が、西脇の私性と容易には結びつきづらい。ところが謎解きのように、解釈を施していくと、また異なる読みがあらわれる。

詩篇の書誌情報としては、初出の『GALA』[五]二号（一九五三年）に収められたときは、「四月の寓話」という題名であり、詩集に組み込まれた際に改題された。このことから、「四月」という語句を西脇が意識していたことが窺える。もちろん、この「四月」は、西脇も訳したエリオットの『荒地』の冒頭を踏まえている。

二行目の「半島」という語句について、架空の半島であるのか、現実のものであるのか、考えてゆく。読み進めてゆくと、「ワサビののびる落合でお湯にはいる」とある。ワサビは日本原産の植物であり、清麗な水辺にしか群生しない。「落合」は、落ち合うという意味で用いられているのか、それとも地名であるのか。この場合の「お湯」は、家湯ではなく、温泉に入っているとも考えられる。しばらく読み進めると、「ネッコ川」と「セコの宿」という語句が見られる。往時の西脇の資料をもとに検証すると、「ネッコ川」は、正しくは猫越川という伊豆半島にある川であることが判る。猫越川と合流する狩野川から上流一キロにわたって続くのが世古峡という渓谷であることも判る。つまり「セコの宿」というのは、「世古（峡）の宿」である。周辺は伊豆随一の蛍の名所であり、観光地であることから、伊豆へ湯治に赴いた西脇が、そこでの記憶をもとに詩を書いたということを導き出すことができる。なお、「落合」について、当地に、川端康成『伊豆の踊り子』ゆかりの「落合楼」という明治創業の温泉宿があるため、これを指すものと考える。「道玄坂」は、東京・渋谷にある坂のこと。西脇は往時、宇田川町に居住し、港区三田にある慶應義塾大学に勤務していたので、よくこの坂を歩いていた。「彼」とは、代田に居住していた萩原朔太郎のことか。すでに鬼籍に入っている朔太郎の往時を偲び、悼んでいると考えられる。

つまり、この詩篇「四月の寓話」は、伊豆の温泉宿に投宿した西脇が、遠く渋谷の地にある道玄坂を行き来した日々に思いを馳せながら、朔太郎を悼んでいるのである。それでは、詩篇に、過去と現在の体験を混在させ、また伊豆と渋谷の坂など実在の地名を混在させているとしたとき、どのような読みが成立しうるのか。オートマティスムの技法で書かれたとされる従来の読みとは、どのように変わりうるのだろうか。このように詩篇において、「伊豆」と「渋谷」のように距離のある地名を併記し、時間軸を混在させることによって、遠くにあるものを近くに、近くのものを遠くにする技法は、シュルレアリスムの方法の一つである、デペイズマン（Dépaysement）と考えられるのではないか。なぜなら『超現実主義詩論』、『シュルレアリスム文学論』によってシュルレアリスムを日本に「紹介」した西脇が、著書のなかで、詩篇において二つの「image」を交錯させることについて幾度も説いていることより、導き出せるからである。つまり、日常において非日常を混在させる手法は、西脇にとって異化作用をもたらせる詩的手法の実践であると考える。

以上のことから、詩篇「近代の寓話」は、決してオートマティスムによる架空の世界の創出ではなく、西脇自身の体験・経験をもとに、詩法の実践として書かれていることを導き出すことができる。

続いて、西脇の私性のあらわれとして確たる証拠となる、彼の居住地がこの分析において重要であると考え、次に列挙する。

新潟県の小千谷に生まれた西脇は、慶應義塾大学入学とともに上京している。上京当時は大学至近の三田に住んでいた。その後、イギリス留学を経て帰国後の一九二六年、三二歳にして慶應義塾大学教授となった西脇は、麻布区富士見町四五番地（現・天現寺）に居を構える。一九三二年、桑山冴子と結婚し、渋谷区宇田川町六三番地に転居。一九三五年、渋谷区宇田川町五九番地に転居。

代田に居住していた萩原朔太郎との交流が始まる。一九四二年、戦況の悪化のため、鎌倉市大町四―三―六、服部禎三方に移る。一九四四年、郷里の小千谷へ疎開。一九四五年、終戦後、渋谷区元広尾二十九番地に転居。一九五〇年、港区芝白金台町一―八〇番地に移る。一九六〇年、渋谷区代々木本町八三七番地に移る。

『近代の寓話』の成立年は前出のとおり、一九五三年であるため、白金台町時代に編まれた詩集ということになる。

西脇は自宅の周辺を散策し、詩想を練ることが多かった。このことは、西脇のエッセイにおいても言及がなされている。つまり、西脇の詩において西脇にゆかりある土地の固有名が記載されているならば、西脇自身の私性の表出として挙げられる。

先述した詩篇「近代の寓話」のみならず、詩集『近代の寓話』すべての詩篇に対しての分析方法として、1、日本国内の地名など、西脇自身が訪れた場所を示している箇所。2、萩原朔太郎など西脇にゆかりのある人物を示している箇所。3、その他、論文構成上必要に応じて摘出した。

分析は特に記載のない限り鉤括弧によって示された語句は、詩篇の題名を意味する。

A　武蔵野での生活と観察

「冬の日」では、

斯くの如くごてごてを思い浮べて
榎のパイプを吸いながら
メグロ駅の方へ冬祭りを見に走つた。

とある。「メグロ駅」とは、目黒駅を意味すると考えられる。同様に、「無常」では、「水仙の咲くこの目黒の山」とある。「冬の日」では「メグロ駅」としていたが、「無常」では漢字表記となっている。

「秋の写真」では、

都にたゞ一つ生き残つている
この武蔵野の門をくゞつてみると
ひとりの監視人以外に人間らしい
ものはなにもなかつた。

とある。西脇は「武蔵野」という詩句を好み、此岸・彼岸のように都市と対比的な概念として用いることが多い。「武蔵野」という詩句は、「むさしの」という表記を用いて、「梅のにがさ」にも用いられている。「梅のにがさ」では「むさしの」が平仮名表記であるのは、前後に置かれた詩句の漢字表記と重なって見られることへの視覚的影響を避ける狙いがあったのではないか。この詩篇のみならず、先述した「冬の日」と「無常」における「メグロ／目黒の山」のように、同音同意の漢字、片仮名、平仮名を混在させることにどのような意図があったのか。この点は論点とし、詳しく後述することにする。

「山椹（さんざし）の実」では、

なぜ私はダンテを読みながら
深沢に住む人々の生垣を
徘徊しなければならないのか

追放された魂のように。

とある。

「深沢」とは、現存する世田谷区の地名。住宅街として知られるが、往時は緑豊かな武蔵野の面影を残す郊外であった。

「アタランタのカリドン」においても、「深沢のおかみさん」とある。なお、題名はスウィンバーンによる一八六五年の劇詩を意味する。この劇詩は、ギリシャ悲劇の形式にのっとって書かれた作品である。

「深沢」のように、世田谷の地名を用いた詩篇は多く、

「午後の訪問」では、

下馬でお湯屋をはじめた男と話が
したいので用賀をまわつて行った。

（……）

世田ヶ谷で古い茶釜を買つて帰つて来た。

とある。「下馬」は現存する世田谷区の地名。「用賀」も、現存する世田谷区の地名。「下馬」から「用賀」は、大山街道（現・国道２４６号線）によって結ばれている。

同様に、「甲州街道を」では、世田谷の地を横断している「甲州街道」への言及がある。

また、「深沢」を拠点にして散策していたのか、近隣の地名への言及もなされている。

「夏（失われたりんぼくの実）」では、「一哩も深沢用賀の生垣をめぐる」とある。

「深沢」から「用賀」は、具体的にどこをどのように「めぐる」かによって差異は生じるが、おおよそ二〜三キロの距離であり、「一哩」（約一六〇九メートル）は、ほぼ相違ないことになる。

世田谷の地は、多摩川によってもたらされた国分寺崖線の台地に住宅街が広がっている。西脇は、世田谷の台地をもたらした、この多摩川についても多く取り上げている。

「人間の記念として」では、

とりのこされた孤島のように
多摩川の盆地に太陽と風とで育て
られ豆畑の中にしやがんでいた。

とある。

「多摩川の盆地」が具体的に何処を指すかは未詳。通常、川は侵食と堆積を作用としている。地質学上「多摩川」によって「盆地」が生成されたとは考えにくい。

同様に、「夏から秋へ」においても、「たま川を渡つて柿生の村をすぎて」とある。「たま川」は前出のように、「多摩川」のこと。ここでも同音同意の「多摩川／たま川」の使い分けがなされている。「柿生」は、現在の川崎市麻生区の地名。小田急線の駅名にもなっている。

このように、「多摩川」への言及は、他に「プロサラミヨン」でも確認できる。

また、

「たおやめ」では、

都の憂鬱にめざめて
ひとり多摩の浅瀬を渡る。

梨の花は幾たびか散つた。
（……）
多摩人よ
君達の河原を見に来た。

というように、「多摩人」なる西脇の想像上の人種が現れている。他方、「多摩川」だけではなく、近隣の河川にも詩想を膨らませるものがあったと考えられ、「野の会話」では、

相模川の上流へ行つてみなさい。
岩躑躅の咲く頃
ゴーガンの村になりそうな
河べりの里が谷にある
そこへ行つてみたい人に知らせるが
よせから橋本の方へ行く街道から
こうもりの先で山栗の枝を分けて
みると、そこに小路がかくれている

とある。「相模川の上流」とあるため、「橋本」は現・相模原市の「橋本」か。

B　記憶に刻まれた地名

世田谷の地名や、多摩川は、西脇が日常的に散策していた場所であるだろう。時期的にも芝白金台町に居を構え、慶應義塾大学にて教鞭を執っていた西脇が、これらの土地を散策し、詩想を深めたことは想像に難くない。ところが、『近代の寓話』は、先述した「近代の寓話」における「伊豆」の地名からも明らかなように、日常的に散策していた場所とは異なる地名も散見される。「南画の人間」では、

名越を廻つて二階堂にいる
小山さんを尋ねたのはこの月だ。

とある。名越は「なごえ」と読み、現存する鎌倉の地名。先述のように、西脇は戦中、鎌倉に居住していたことからも、確度が高い。二階堂も同様に鎌倉の地名である。「小山さん」とは、西脇と親交があり、評伝にも記述が残されている陶芸家の小山富士雄（こやまふじお）のこと。詩篇の後半に「宋時代の磁器のかけらを」とあることも大きな理由である。「南画の人間」は、その後、

シャカ堂道をのぼつて行くと

という詩句がある。前述より類推すると、鎌倉の釈迦堂道を表していると考えられる。

「桃の国」では、「狩野川の土手」という詩句がある。その後、「菜種の畑に伊豆のコンガラ童子」とあることから、「狩野川」は伊豆に実在する川を指し示すことがわかる。コンガラ童子とは、矜羯羅童子と記し、不動明王に仕える八大童子の七番目の尊格のこと。伊豆に在る願成就院には矜羯羅童子が祀られている。「磁器」では、

屋根の傾きしか見られない
これが古の都をさすらう我身の

なさけない存在なのか。だが
その日は山あじさいの咲く崖を
下りて宋元の磁器のかけらを
数万も集めた人の門をたたいた。

とある。「南画の人間」との共通項がみられる。「人」とは小山富士雄を指すと考えられる。

このように、「メグロ／目黒の山」あるいは「武蔵野」、そして「深沢」や「用賀」など世田谷の地名という西脇が日常的に散策した地名が現れるとともに、遠く、鎌倉の地名も出現する。戦時中に鎌倉の地に滞在していた時期と、「南画の人間」が編まれた時期とでは、時期的な隔たりがある。そのため、現在から過去の体験を思い返している西脇の像が浮かび上がってくる。

C　記憶に刻まれた人物

西脇が、現在から過去の体験を思い返しているとき、無論地名だけを思い返しているのではない。先述の「小山さん」のように、西脇の記憶に宿るのは、そのとき、その瞬間に交流した人物との記憶を掘り返している。

「山の酒」では、

極度にやせたひとが
マンドリンをひく家に
一夜をあかしたのだ
北海道から来た女アメリ
神奈川から来た女カサンドルは
灰色の酒をついで歌つた

この、「マンドリンをひ」いた人物は、マンドリンを愛した萩原朔太郎と考えられる。

なお、この詩篇「山の酒」は、西脇の体験にもとづく記憶が色濃く反映されている。そのため、より詳細に引用をほどこすことにする。

雪女の庭に春が来る
生きていた時紫のタビをはいた
女にあげる
あらびあ語に訳した伊勢物語を
（……）
八瀬の道は今昔の思いがする
まつたけを土産にもつていた
老人の女に都の学生が
驚くべき言葉をつかつたのだ

このように、想像によって構成された幻想的な詩句に、具体的な事物が混在している。このような詩風は、西脇独自のものであり、オートマティスム技法に則ったシュルレアリスム作品とも、萩原朔太郎ら近代詩人の同時代作品とも大きく異なるものである。なお、「八瀬」は、京都の地名である。

「北東から」では、

哀れな旅学者は
箸箱に林檎を一籠もらつて
ダットサンにつめられて
正午の汽車へいそいだ

都へ帰る汽車の都合でまた秋田へ
もどつてとまつた
『オイ』と親切な秋田人がまた笑つた

「旅学者」とは、西脇自身のことか。「箸箱に林檎」とあるが、通例「箸箱」のような細長い入れ物には「林檎」は入らないため、比喩か。「ダットサン」とは、現・日産自動車の前身会社のひとつによって販売されていた乗用車である。「秋田」の人との交流を描くというよりは、「哀れな旅学者」たる自身を笑うペーソスにあふれている。

「夏の日」にも、記憶が色濃く反映されている。

そこくに僕はロンドンへ行つて、
その晩ヂオン・コリアとビールを飲み
薔薇の枝の様に細いアフリカのシガーをのみ、
詩の話をした。夜遅く
プリムロウズに住む友人の戸をたゝいた。
彼は丁度「失楽園」程の長い詩を作つていた。
翌日、単独でルネサンスの地へ走つた。

イギリス留学時代の記憶か。ほぼ、記憶そのままに、エッセイ調として書かれた詩である。

「山の暦（イン・メモリーアム）」では、

昔小伝馬町から芝高輪へ転居して
中国に近づいたと言つて
よろこんだ荻生徂徠もバスの通りに
面している。
江戸の三味線づくりのなんとかという
男の墓はぎよらん坂の中途だ
東海道の一部分であつた二本榎の通りを
歩いて、やがて横みちを下りて
どこかへすがたを消す

小伝馬町は現存する東京の地名。「荻生徂徠」が「中国に近づいたと言つてよろこんだ」かは未詳。ただ、「よろこんだ」のは作中の主体であり、「荻生徂徠」ではないという解釈も成立しうる。「ぎよらん坂」は高輪の「魚藍坂」のこと。

なお、魚藍坂近辺の地名は『Ambarvalia』の「内面的に深き日記」にも次の引用にあらわれるように「伊皿子人」がある。『Ambarvalia』における「伊皿子人」と、先述した「たおやめ」における、「多摩人」とは、通底する詩法のもとに書かれているものと導き出すことができる。

一つの新鮮な自転車がある
一個の伊皿子人が石鹸の仲買人となつた

「二本榎の通り」も高輪にある通りのこと。「東海道の一部分であつた」も、間違いではない。この通りを高輪側から進むと西脇が教鞭を執った三田の慶應義塾大学に行き着く。「多摩川」という詩句における表記の使い分けについては、先述した。『近代の寓話』では、同音同意の漢字、片仮名、平仮名が、詩篇によって使い分けられている。使い分けによって生じる効果は、無論同音であるため、聴覚情報ではなく、視覚情報の操作に伴うものである。では、「魚藍坂」を「ぎ

よらんざか」と表記することによって、どのような効果がもたらされるのか。ここで比較検討をするため、「山の暦（イン・メモリーアム）」における「ぎよらんざか」を「魚藍坂」と表記した場合を例示する。

江戸の三味線づくりのなんとかという
男の墓は魚藍坂の中途だ

この詩句の場合、解釈に迷いを生じさせない。「江戸の三味線づくり」を生業とする「なんとか」という「男」の「墓」が、「魚藍坂の中途」にあるという文意が、はっきりと示されている。情報伝達の手段として、エッセイ調に書かれたものであるならば、何の問題も生じ得ない。しかしながら、これを詩として解釈すると、詩としての完成度に欠けるのではないだろうか。なぜなら、この詩句には謎が内包されていないからである。先述した「山の酒」では、「想像によって構成された幻想的な詩句に、具体的な事物が混在している。」と述べた。このことを換言すると、現実に立脚した地名や人名などの情報と、解釈しえない、あるいは解釈に幾通りもの可能性がある謎とが、ひとつの詩篇に混在しているということである。これまでの分析は、謎を解明するためであった。つまり、西脇の私性の表出を示すことは、詩篇における謎の含有量を減らすことに繋がっていたのである。ところが、すべての出典を明示し、西脇の私性を解き明かしてもすべての謎が解明されることはない。このことについて、西脇自身の詩論である『超現実主義詩論』で以下のように述べている。

詩の正統な形式は imagination により現実を一旦魂の吸収に適する様に変形して表現することである。

例、空が眼に青く見える物理上の事実、換言すれば所謂、つまらない現実「普通の事柄」を詩的認識にするために、詩人は「汝の空の眼球」と言う。これを原始時代的詩人は単に「空は青い」と現実そのまゝに用いるだろう。前者は近代の詩人の詩的変形である。

このことを踏まえると、通常漢字表記が一般的な「ぎよらんざか」を敢えて平仮名にして詩篇に内包させることは、西脇にとって「詩的変形」という自身の詩論の実践なのである。魚藍坂近くの伊皿子坂に「伊皿子人」なる人種を登場させたのも、「普通の事柄」である「伊皿子」から、伊太利亜を連想させ、伊皿子人という、西洋の人種のようにイマジネーションを飛躍させる「詩的変形」であると考える。同様に、「多摩川」に「多摩人」という人種を登場させたのも、「武蔵野」の面影が強く残る「多摩川」という「現実」を、「一旦魂の吸収に適する様に変形」させた「詩的変換」であると、考える。

D　旧名への志向性

これまでの分析によって導き出されたのは、主に場所と場所との距離による詩的変換であった。『近代の寓話』では、さらに、今昔によってもたらされる距離による詩的変換の例も抽出できる。

「かなしみ」では、「上州の山おくに」という詩句がある。
「粘土」では、

十月の初め三人の男が
洋服をきて下総の
湖水地方を歩いた

とある。「かなしみ」や「粘土」のように、旧国名を用いることにより、詩の

読者に、いつ、どこで、なにが起きているかが固定化させない効果が生じると考える。

「道路」にも、「十月の八瀬大原の道に」とある。前出の「八瀬」と同様である。「地獄の旱魃」では、「河内の国に住んでいる人の吹く／笛の音を憶うのだ。」とある。ここでも、前出のように旧国名があらわれる。

同様に、「留守」においても、

十一月の末
都を去つて下総の庵に来てみた

旧国名が用いられている。

以上、『近代の寓話』の詩句分析を行った。この結果、特徴を四点に分類することができた。

一つは、武蔵野に居住し生活した西脇の観察によるものである。表記をその都度選択しながら幾度も用いられている「多摩川」という詩句に代表されるように、世田谷の地名からは、散策し詩想を深める西脇という像が浮かび上がり、これは私性の表出であると考える。また、「多摩人」という造語は、『Ambarvalia』における「伊皿子人」という詩句の選択と、通底する詩法で書かれているものと考える。

次に、記憶に刻まれた地名のあらわれである。戦時中に滞在した鎌倉の地、あるいは伊豆温泉地でのできごとなど、過去の体験にもとづく記憶を、詩篇に幾度もあらわしている。

同じように、記憶に刻まれた人物も詩篇に頻出している。亡き萩原朔太郎を偲び、「秋田」や「ロンドン」、「八瀬」の旅を思い返すなど自身の記憶を詩へと変換する詩法の実践を模索していたと考える。また、「魚藍坂」を「ぎよらんざか」と表記するなど、詩篇における読者への視覚効果への探求も認められる。

最後に、遠近の距離だけではなく、今昔による距離の表出として、失われた地名である旧地名への志向性も特徴として挙げられる。

これらの特徴から、実際の記憶と想像を混在させる詩法があらわれていると導き出すことができる。「山の酒」に代表されるように、西脇の詩篇は、一見するとシュルレアリスティックな装いをとりながら、実のところ西脇自身の体験に根ざしたものが頻出される。これは、西脇自身の「詩的変形」の実践といえる。この実践は表記の工夫にも特徴としてあり、「メグロ」や「たま川」、「ぎよらん坂」のように、実在の地名の漢字表記をひらいたり、片仮名に変えることによって、実在の世界をさながら創作されたフィクションへと異化させる作意が認められる。

以上のことより、詩集『近代の寓話』には、西脇自身の体験・経験が、詩篇に表れていると論を導くことができる。シュルレアリスムとは異なる、西脇独自の詩法というよりは、むしろシュルレアリスムを学び・紹介した西脇が、シュルレアリスムの特徴を踏まえた上で、この詩法を発展的に構築しなおしたと解するべきではないか。

井上輝夫は、

『近代の寓話』という詩集は全体から見れば、絵画的な手法を取りいれて近代の文人の詩的日録という性格をもっている。そしてこの詩集をもって、西脇詩は西洋の文物の記憶と武蔵野をはじめとする日本の風景とを往還する方法を身につけた[七]

と述べているが、西脇の「絵画的な手法」は『旅人かへらず』から顕著にみ

られる特徴であり、『近代の寓話』からはじまったとは考えにくい。また、「西洋の文物の記憶と武蔵野をはじめとする日本の風景とを往還する方法」という言も、詩集の特徴を捉えているとはいえ、『近代の寓話』のみの独自のものとは考えられない。むしろ、『近代の寓話』に限らず、西脇のすべての詩集に、西脇自身の記憶にもとづく、西洋の文物や影響は見られるものであり、問われるべきは、詩法であり、西脇の私性が詩篇にあらわれているか否かではないかと考える。

第二項　植物を観察し記す〈私〉

第一項では、1、日本国内の地名など、西脇自身が訪れた場所を示している箇所。2、萩原朔太郎など西脇にゆかりのある人物を示している箇所。3、その他、論文構成上必要に応じて摘出した。本項では、『近代の寓話』における植物に着目する。先行研究においても、『近代の寓話』における植物は論じられている。澤正宏は、

> 西脇順三郎が永遠の観念との妥協をやめ、日本の自然（植物中心の自然である）を見つめていく視点を現実の側に移行させてくるのは、生命に対して感ずる哀愁の深さに
> よってである。[八]

と述べ、謂わば「視点を現実の側に移行させてくる」ために植物というモティーフに着目している。西脇が植物を詩篇に多用していること、現実に立脚した視点を有していたことには澤の論と相違ない。しかしながら、澤の論点では、西脇の詩法ではなく、「哀愁の深さ」という西脇の個人の感情や感慨に回収してしまうため、結局のところ、西脇の詩は「難解」であるという点から脱却できないのではないか。なぜなら、つまるところ「哀愁の深さ」という西脇個人の問題を読者は想像することができても、「深さ」は立証できないためである。幾つもの読みの可能性が示される西脇の詩において、植物の名を列挙することは、西脇の私性が認められるかという点において重要であり、つまり西脇の詩法のあらわれとして、読み解きすることが可能であるという立証に繋がるのである。

まず、第一項でも西脇による武蔵野での生活と観察の特徴があらわれていると取り上げ、詩篇において幾度も植物名があらわれる「山橿の実」の全文を引用する。

> 山橿の実
>
> なぜ私はダンテを読みながら
> 深沢に住む人々の生垣を
> 徘徊しなければならないのか
> 追放された魂のように。
> 青黒い尖つた葉と猪の牙のような
> とげのある山橿（さんざし）の薮になっている
> 十月の末のマジエンタ色の実のあの
> 山橿の実を摘みとつて
> 蒼白い恋人と秋の夜に捧げる
> だけのことだ
> なぜ生垣の樹々になる実が

あれ程心をひくものか神々を貫通
する光線のようなものだ。
心を分解すればする程心は寂光
の無にむいてしまうのだ。
梨色になるイバラの実も
山榲の実もあれ程 Romantique なものはない。
これほど夢のような現実はない。
これほど人間から遠いものはない。
人間でないものを愛する人間の
秋の髪をかすかに吹きあげる風は
音もなく流れて去つてしまう。

世田谷の「深沢」という地を逍遥している作中の主体の像が浮かぶ。山榲は、往時「深沢」でも日常的に目にする植物であったと考えられ、「マジエンタ色」の山榲から、詩想を膨らませたと考える。このように、「深沢」も、「山榲」も、西脇の私性である経験や体験の描写であると考えられる。すると、この詩における作中の主体の感情の描写は、「山榲の実」を発見した西脇の感情と同一のものではないか。具体的には、「なぜ生垣の樹々になる実が／あれ程心をひくものか」という箇所や、「心を分解すればする程心は寂光／の無にむいてしまうのだ」という箇所は、「山榲」を観察している西脇が、山榲の色やありさまから、自身の感情を山榲に仮託させて吐露していると考える。

このように、植物の観察を通じて、自身の感情を吐露している詩は、「午後の訪問」にもあらわれている。

午後の訪問

バスの終点から野原へ出てみた。
のびた麦は月夜の海のように銀色に光つていた。
春の淋しさは夏のさびしさへと
いつの間にか変わつていたのであつた。
（後略）

「野原」でみた「のびた麦」の色が「銀色に光つていた」ことに、「春の淋しさ」から「夏のさびしさ」への時間的経過を感じたと解釈できる詩である。観察する主体の感情を、観察対象である植物になぞらえてあらわしている点は、「山榲の実」と共通しており、さらには「午後の訪問」には、「春」から「夏」への時間的経過も、植物の定点観察によってあらわれている。

植物を観察し、詩にあらわす西脇の詩法は、西脇の私性と密接につながっているのと同時に、西脇の感情・心情を直接あらわしているのではなく植物に仮託するという間接的な手法を用いている点に特徴がある。この特徴は、第一項で論じた自身の記憶に基づく地名や人物を、現実の事物と織り交ぜることによって体験を詩に異化させる「詩的変形」と類似のものと言えるのではないか。

このことを立証するため、『近代の寓話』における植物名をすべて抽出することにした。なぜなら、もしも『近代の寓話』における植物名が、実際に西脇が観察したものと思われるものであり、詩篇での用いられ方が「山榲の実」、「午後の訪問」と、同一のものであるならば、植物に自身の感情を仮託した西脇という像が、『近代の寓話』を通底する詩法であるということになるからである。『近代の寓話』における植物を抽出するにあたり、表記は原典に拠った。原則、重複する名称は一度のみ記載した。下記に列挙する。

「麦」、「油菜」、「罌粟」、「ワサビ」、「ツツジ」、「アヤメ」、「スモヽ」、「桜」、「菫」、「シャガの花」、「野イチゴ」、「レンゲ草」、「キンポウゲ」、「野バラ」、「リンボク」、

「あざみ」、「バラ」、「リンドウ」、「鬼百合」、「むくの木」、「ゴンズイの実」、「キノコ」、「林檎」、「栗」、「椎の古木」、「菊」、「がまずみの実」、「くぬ木」、「梅の庭」、「芝の花」、「姫百合」、「むくげの花」、「珊瑚樹の実」、「虞美人草」、「葡萄園」、「杏子の実」、「黄色い百合」、「プラタナスの葉」、「水仙」、「梨のような花」、「茄子」、「イバラの実」、「さんざしの木」、「山あじさい」、「タンポポ」、「どうだんの木」、「よそぞめ」、「こひるがお」、「グミ」、「サンショウ」、「マサキ」、「ウルムスの樹」、「アセビの花」、「からたち」、「まつたけ」、「大根畑」、「梅」、「鉄炮百合」、「樫の古木」、「槇」、「柿」、「ミモザの花」、「シャクナゲの薮」、「ドングリ」、「ジャガイモの花」、「ひがん花」、「榎の大木」、「へちまの花」、「浜茄子」、「桔梗」、「蘇芳の花」、「オレアンダの花」、「イラグサ」、「山ごぼう」、「タランボウの木」、「ポプラの葉」、「ダリアの花」、「アメンドウの樹」、「アネモネの花」。

以上、『近代の寓話』に収められた語句を分析した。類似の植物でも、例えば「百合」の場合は、「鬼百合」、「黄色い百合」、「鉄炮百合」というように、使い分けがなされている。西脇の観察の細やかさがここにあらわれている。また、抽出した植物名の繁茂期から考え、西脇が特定の季節ではなく、通年観察していたということも特徴として挙げられる。

この分析から、主に二点の特徴が既に認められる。

一点目は、詩篇において、極めて膨大な植物名をあげる志向性が、西脇順三郎には明確にあったということ。イマジネーションによる架空の植物ではなく、往時実際に触れることができた植物を挙げていることから、実際に観察した植物が西脇の詩想に影響を与えていると考える。

二点目は、挙げている植物の大部分が、西脇の居住した日本において群生しているということである。このことは、『Ambarvalia』において、西洋的なモティーフを用い、また西洋においてのみ群生している植物を記していることと比較して明らかな差異がある。それと同時に、西脇順三郎の詩法が、『旅人かへらず』以降、作者である西脇自身を観察者とし、植物を主とした視覚情報による描写を重視している。換言するならば、『Ambarvalia』において、想像上の、或いは観念的な固有名詞を多用し、西洋的な文物への志向性が見られたこととは様変わりしているのである。

抽出した詩篇において、植物は作中の主体である西脇の感情をときに仮託し、ときに増幅させる装置として機能している。例えば「道路」では、「ジンジャの花を愛する女」という対象の「眼」に「すべての追憶は消えた」と結合しており、他方では、「たおやめ」においては、「赤い薔薇」と「この淋しい男」の両者の比喩が結びついている。

以上のことより、先に例示した「山櫨の実」、「午後の訪問」の分析によって得られた論点は、詩集『近代の寓話』に通底する西脇の詩法であると考える。また、澤正宏による「視点を現実の側に移行させてくる」手法には結論として改めて異議を唱えざるをえない。なぜなら、これまでの論で示した通り、西脇による植物の描写は、「視点を現実の側に移行させてくる」のではなく、現実という視座に立つ西脇の私性の感情を仮託し、増幅させる装置として機能している詩法であるからである。

最後に、先行詩集である『Ambarvalia』と『近代の寓話』と私性が通底しているかという論点について、収録されている「キャサリン」には、

おかみさんは西方の神話がいかに
植物的であるかということを喜んだ。

という箇所がある。この詩篇における、「西方の神話」という語は、『Ambarvalia』を示す比喩として機能していると考える。なぜなら、『Ambarvalia』

において「西方の神話」という語句が幾度も用いられているばかりではなく、他の詩集ではこの詩語が用いられていないためである。つまり、『Ambarvalia』において「植物的である」という特徴を『近代の寓話』のテクストからも抽出したため、ここから、西脇の作品において『Ambarvalia』のみが、他の詩集と比べて特異なのではなく、先の研究論文とあわせて、『Ambarvalia』、『旅人かへらず』、『近代の寓話』、この三冊の詩集において通底する詩法であると考える。

おわりに

本論文では、西脇順三郎詩集『近代の寓話』の詩句の分析することにより、これまでシュルレアリスム的な詩であると目されてきた西脇詩の再検討について論じた。

第一項では、詩篇における土地の名称や人物名などに注目し、これらを抽出することによって、西脇の経験や体験に基づく私性が詩集に認められるかを検証した。検証の結果、『近代の寓話』における詩句は、土地の名称や人物名など、西脇の私性によって解読できる箇所が複数挙げることができ、このことにより、西脇の詩はあくまでも現実に立脚した上で、西脇自身の詩論である「詩的変形」の実践として書かれていることを導いた。また、「たおやめ」における「多摩人」という造語は、『Ambarvalia』における「伊皿子人」と通底する現実を異化する西脇の詩法のあらわれであり、この詩法を用いた例は、他に「メグロ」や「たま川」のように、表記を詩篇によって変化させる特徴にあらわれている。

第二項では、詩篇における植物名を抽出した。「山榲の実」や「午後の訪問」では、植物に自身の感情を仮託した西脇の像が浮かび上がった。前述を踏まえて、詩集におけるすべての植物名を抽出した結果、現実という視座に立つ西脇の私性の感情を仮託し、増幅させる装置として植物が機能していることを明らかにした。

西脇順三郎の詩法は、『旅人かへらず』以降、作者である西脇自身を観察者とし、植物を主とした視覚情報による描写を重視している変化が認められる。つまり、近代詩の詩法である作中の主体と作者との同一性が認められる極めて私的な詩へと変化しているのである。

詩集『近代の寓話』は、西脇の経験や体験に基づく私性が詩篇に表れており、現実に立脚した植物や地名、人名などを配することによって西脇自身の詩論である「詩的変形」の実践として書かれている。この、体験と想像を織り交ぜる詩法によって、萩原朔太郎らの近代詩の私性のあらわれの発展系たる私性を打ち出していると考える。この詩法は、近代詩の継承・発展とも捉えることができると同時に、西脇が「紹介」したシュルレアリスムの詩の発展系として作りだされた詩集であると、結論づける。

注

一　『西脇順三郎全詩引喩集成』、三頁、引用

二　田中滋啓「『Ambarvalia』論のために――「天気」の解釈を通じて」では、「『ambarvalia』は、その題名の異色さとともに画期的な内容を持った詩集である。その破壊的な文体といい、抒情を絶した内容といい、朔太郎の『月に吠える』でさえも古めかしくみえてくる程の新鮮さを持っている」と述べている。また、林巾力「旅人かへらず」では、「周知のように戦前の西脇は、現代詩の言語革命を企図し、従来の日本語の語文脈と違ったスタイルで一連の実験的かつ難解な作品を意識的に書いたのである」と述べている。両論文とも、西脇の詩を手放しで持ち上げてはいるが、これまでと異なる詩風であること、「難解」であること以外には分かり得ない、曖昧な表現に留まっている。

三　山﨑修平「幻影の先にあるもの――西脇順三郎論」法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻修士課程修士論文、二〇二一年、『さみしさ』の差異：萩原朔太郎と西脇順三郎の詩について」四季派学会論集二七号、二〇二二年

四　千葉宣一『西脇順三郎研究』『近代の寓話』試論、三〇六ページ、引用

五　村野四郎、北園克衛、西脇順三郎らによる詩誌

六　冴子夫人の親戚筋

七　『西脇順三郎コレクション』Ⅰ、「解説」、一三〇頁
八　『西脇順三郎の詩と詩論』、一〇四ページ、引用

参考文献一覧

村野四郎、福田隆太郎、鍵谷幸信共編『西脇順三郎研究』右文書院、一九七一年
田中滋啓「『Ambarvalia』論のために――「天気」の解釈を通じて」広島大学『近代文学試論』一六号、一九七七年
新倉俊一『西脇順三郎全詩引喩集成』、筑摩書房、一九八二年
澤正宏『西脇順三郎の詩と詩論』桜楓社、一九九一年
林巾力「旅人かへらず」法政大学国文学会『日本文學誌要』五八号、一九九八年

本論文の引用にあたり、『西脇順三郎コレクションⅠ』（慶應義塾大学出版会・二〇〇七年）を底本とした。